

おもしろいから遊ぶんだ・

かくれんぼのオニになって目を開いたときの寂寞とした空間。

隠れている子を思い浮かべながら探す気持ちのはやり、忍び寄るときの緊張感。

そのオニの一挙手一投足を息を詰めて見守りつつ、ワクワクして待つ気分。

裏をかくて逃げようとしたときに見つかる悔しさ。

遊びに世界にのめりこみ、集中し、躍動するこうした体験を、古田足日氏は「美的経験」として意味づけようとしている。

それは、始まりと終わりがあり、その間にハラハラしたりドキドキしたりと感情の動いている、時間をともなったものである。

私たち教師は、とかく「この遊びの教育的価値は…」と考えてしまうが、子どもたちは別に教育的価値があるから遊ぶわけではなく、楽しいから、おもしろいから遊ぶのである。

今回、読者諸氏に問いかけたいのは、おとなにとっては「その価値が先行」し、「前提の追及」がおろそかになってこなかったかということである。

すぐに遊びを禁止しないで

山陰地方のある海辺の町で「子どもたちが海で泳げなくなった」といわれたことがある。その近辺は、山陰海岸国立公園の一角に位置し、小さな漁港が点在する。自転車で行けるところにいくつもの浜があり、砂浜や磯のバリエーションが楽しめる場所である。

その町の子が、なぜ海で泳げなくなったのか。その原因分析では、次のようなことがあげられた。

①「危ないから」と学校で子どもだけの海遊びを禁止した。

②少年野球の普及にともない、時間を取られるだけでなく、身体を冷やさないようにと海遊びが禁じられた。

よかれと思ってなされる子どもへの配慮（規制）は、時として、遊びの素材になる地域の豊かな自然環境でさえ、子どもにとってなじみの薄い、親しみにくいものにしてしまう。

「水辺に近づくな」「魚つり禁止」「木に登るな」「芝生に入るな」etc.

環境整備や子どもの命を守るためには必要なことかも知れないが、「あれもダメ」「これもダメ」と禁止しておいて、「最近の子どもはあまり外で遊ばない。私達の小さい頃はその辺を所せましと走りまわったものだ…」「生き生きと遊びまわる姿を見たことがない…」となげいたところで何も変わらない。

何をどこまで規制するかは、おとなが人為的に決めることだ。おとなたちは安易に結論を導き出すのでなく、もう少し腰をすえて、子ども・人間・環境などについて語り合うべきである。

これらの規制の範囲は、おとな同士の信頼関係を反映するからだ。

本気で遊ぶ力をつける

子どもたち、特に男子が好むのは、ベッタン（メンコ）やビー玉など勝ち負けがはっきりつく遊びだ。しかし、これらの大好きな遊びも、学校へは持ち込み禁止である。

持つ者の慢心や持たざる者の卑屈な思いを刺激する、勝った者が負けたものの分を奪ってしまい、負けた者は何百円も損してしまう…などが持ち込み禁止の理由だ。

そして家庭でも、禁止にしないかわりに「ホンキはなし」（勝っても相手のベッタンやビー玉を奪わない）という約束をさせられたりする。

一番おもしろいところを取り上げられた遊びに子どもたちをひきつける魅力などなく、やがてはすたれていくことになる。「ウソキ」のビー玉などは、これらの遊びの性格からして、向かい合う緊張感や息を詰めて技をかけ合う気持ちの高まりの行き場がなく、感情の揺れ動きの醍醐味に欠けることは容易に想像できる。

これらの遊びの規制は、子ども同士の人間関係への配慮のためになされている。子ども同士の関係の中に遊びを通して、上下や優劣が持ち込まれないように、いじめの要素が持ち込まれないようにという配慮といえる。

しかし、子ども同士の遊びの中には、常に緊張関係は存在しているし、そのことを通してお互いの関係を測っているのではないか。

これら（上下・優劣関係や「いじめ」など）が発生しないようにおとなが遊びを管理する。これは、教育的な配慮からいっても妥当なように思う。

しかし過度の管理は、遊びのおもしろみを奪うばかりか、遊びを通じて子ども同士がお互いにぶつかり合い、勝ったときの飛び上がりたくなるような喜びや、後一步のところでは敗れた悔しさを交互に味わう中で成長し合う体験からも遠ざけてしまう。

いじめを恐れて、かえって子ども同士の人間関係を鍛えあう場を奪うことによって、ますます「遊びの規制」が必要に感じられる事態を、おとながつくり出しているのではないだろうか。

今一度、考え直すべきである。